

There構文とDP移動に関する統語的分析

前田, 雅子
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6791155>

出版情報 : 九大英文学. 50, pp.451-471, 2008-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



There 構文と DP 移動に関する統語的分析*

前田 雅子

1. はじめに

本稿では、*There* 構文の Wh 移動に関する現象を統語的に説明することを試みる。*There* 構文には(1a)のような Be 動詞の他に、(1b)のような非対格動詞、また、(1c)のような非能格動詞が生起できる。

- (1) a. There is a book on the table.
b. There exist a number of similar medieval crosses in different parts of the country. (Quirk *et.al* 1985)
c. There walked a man into the room.

There 構文はこれらの動詞の違いによって Postverbal DP の移動の可能性、また、Postverbal DP 内からの要素の抜き取りの可能性が異なる。まず、(2a,b)に示されるように、Be 動詞を含む *There* 構文は DP の移動、または DP 内からの要素の抜き取りは可能である。¹ それに対し、非対格動詞や非能格動詞を含む *There* 構文は移動や抜き取りに関してより厳しい制限を示す。非対格動詞の場合、(2c)のように DP の移動は不可能であるが、(2d)に示されるように DP 内からの要素の抜き取りは可能である。さらに、非能格動詞の場合は、(2e,f)に見られるように、DP の移動、DP 内からの移動ともに不可能となる。これは概略(3)のようにまとめられる。本稿では非対格動詞、非能格動詞を用いた *There* 構文が示す Wh 移動に関する制限を、Postverbal DP の焦点化との観点から分析する。

- (2) a. How many men are there in the garden?
 (Hoekstra&Mulder 1990)
- b. Which wall do you think there was a picture of t? (Moro 1997)
- c * How many packages did there arrive in the mail?
 (Chomsky 2001)
- d. Of which artist did there hung a portrait on the wall?
 (Nishihara 1999)
- e. *Who did there run down the street? (Emoto 2004)
- f. *Of which community did there walk a member into the room?

(3)

	Movement of DP	Extraction out of DP
Unaccusative	*	OK
Unergative	*	*

本稿は以下の構成である。第 2 節で、CP 領域への Wh 移動と焦点化移動を考察する。その際、Rizzi (1997)の仮定に従い、A'移動は、CP 内の対応する主要部が要素をひきつけることにより起こると仮定する。さらに、この仮定を拡張し、同一句内に異なる A'素性を含む句が共起する場合、Split A'-Movement が起こり、各々の要素は CP 領域内の異なる投射へと移動すると主張する。また、A'移動に関し、Rizzi (2002)の Feature Relativised Minimality と Rizzi (2006)の Criterial Freezing が働くと仮定することで、焦点要素と Wh 句の移動に関する相互作用を説明する。次に、第 3 節では第 2 節で主張した A'移動のメカニズムが vP 領域でもあてはまると主張する。具体的には、There 構文では Postverbal DPが vP 領域で焦点化されることが、Postverbal DPの移動、また、Postverbal DP 内からの要素の抜き取りの可能性に制限を加えると考察する。第 4 節は本稿のまとめと結語である。

2. CP 領域への A'移動

英語において、焦点要素は CP 領域へ移動し、焦点化されることがで

きる。これは、(4a)のように主節でも、(4b)のように従属節でも起こりうる。

(4) a. With no job would Mary be happy.

b. Lee said that at no time would she agree to visit Robin.

(Haegeman 2000)

また、(5)に示されるように、従属節において焦点要素は *Wh* 句と共に起可能である。ただし、その場合は *Wh* 句が焦点要素に先行しなければならない。

(5) a. Terry is the person for whom not even a postage stamp did I remember to buy.

b. *Terry is the person not even a postage stamp for whom I remember to buy.

c. *Terry is the person not even a postage stamp for whom did I remember to buy. (ibid.)

これは Rizzi (1997) の階層化された CP 構造により説明される。Rizzi (1997) は (6) のような構造を CP は持ちうるとし、焦点要素や話題化要素が CP 内に移動する際、*FocP* や *TopP* が投射されると主張する。² また、Rizzi は、従属節の CP 内において *Wh* 句は *Spec ForceP* へ移動し、焦点要素は *Spec FocP* へ移動することを示した。この階層構造が (6) の線形順序に反映される。すなわち、従属節において、*Wh* 句の着地点である *Spec ForceP* は焦点要素の着地点である *Spec FocP* よりも上位にあるため、*Wh* 句が焦点要素に先行しなければならないのである。

(6) *ForceP...TopP*...FocP...TopP*...FinP...IP*

(Rizzi 1997)

次に、*A'* 移動に関する制約を考察する。(7a)に示すように、*Wh* 句は従

属節の CP 領域へと移動し、そこで Wh 特性を満たすことは可能であるが、(7b)に示すように、その後さらに主節へと移動することは不可能である。これは、Wh 移動した句がさらに主節へと Wh 移動することができないことを示す。

(7) a. Bill wonders which book she read.

b. *Which book does Bill wonder she read? (Rizzi 2006)

また、イタリア語においても同様の事実が見られる。(8a)は *quale RAGAZZA* ‘which girl’ が従属節の CP 領域へ Wh 移動していることを示す。(8a)のように、Wh 句はこの従属節の CP 内で焦点化されることは可能であるが、(8b)のようにさらに主節へ焦点化移動すると非文となる。すなわち、要素は従属節内で Wh 移動したあと、主節へと焦点化移動することは不可能である。

(8) a. Mi domandavo quale RAGAZZA avessero scelto, non quale ragazzo
‘I wondered which GIRL they had chosen, not which boy’

b. *Quale RAGAZZA mi domandavo avessero scelto, non quale ragazzo.
‘which GIRL I wondered they had chosen, not the boy’
(Rizzi 2004)

Rizzi (2006)は(7b)、(8b)のような文の非文法性は(9)の *Criterial Freezing* によるものであると主張した。これは、概略、A'移動した要素がさらにA'移動することを妨げる制約である。Minimalist Programの仮定のもとでは、要素は生じた位置で θ 役割などの項構造の特性を満たし、移動先で解釈やScope特性を満たすと考えられる。Rizziはこの仮定をさらに推し進め、要素は一つの項構造特性と一つの解釈特性を満たすと仮定し、一つの要素が二つ以上の解釈特性を持つことはできないと主張する。この仮定の下では、解釈特性は、*Criterion*と呼ばれるその要素をひきつける主要部との *Spec head agreement*により満たされる。例え

ば、従属節において、Wh句はForce⁰とのSpec head agreementにより(10)のWh Criterionを満たし、焦点要素はFoc⁰とのSpec head agreementにより(11)のFocus Criterionを満たす。Criterial Freezingの制約は、要素がこのようなCriterionを満たした後、さらに別のCriterionを満たすために移動することを禁止するものである。

(9) Criterial Freezing (Rizzi 2006)

A phrase meeting a criterion is frozen in place.

(10) The Wh Criterion (Rizzi 1996)

- a. A WH-operator must be in a Spec-head configuration with an X⁰[WH].
- b. An X⁰[WH] must be in a Spec-head configuration with a WH-operator.

(11) The Focus Criterion (Haegeman 2000)

- a. A Focus-operator must be in a Spec-head configuration with an X⁰[FOCUS]
- b. An X⁰[FOCUS] must be in a Spec-head configuration with a Focus-operator.

この制約によると、(7b)の *which book* は従属節の CP へと Wh 移動した際、Wh Criterion を満たし、Criterial Freezing に従うため、さらに主節 CP へと Wh 移動することができない。(8b)も同様に、*quale RAGAZZA* ‘which girl’は従属節で Wh Criterion を満たし、Criterial freezing に従うため、さらに主節へと焦点化移動することができず、派生は破綻する。ただし、移動の中間地点では Criterion は満たさないため、(7a)のように、Wh 句が従属節の CP を単に経由する場合は Criterial Freezing はおきない。

ここで、Criterial Freezing が制限を加える句の範囲について考察する。(12a)は *quanti libri di quale autore* ‘how many books by which author’が従属節で Wh Criterion を満たした後主節へとさらに Wh 移動

しているため非文となっている例である。しかし、(12b)に示されるように、*quanti libri* ‘how many books’が従属節の CP 内に留まり、*di quale autore* ‘by which author’ が主節へとさらに移動することは可能である。Rizzi (2004)はこのような例を根拠に、*riterial Freezing* は *riterion* を満たす主要部の更なる移動にのみ制限を与えると主張した。よって、(12b)において、*quanti libri* ‘how many books’ は *riterial Freezing* により移動できないが、埋め込まれている *di quale autore* ‘by which author’はさらに移動することが可能である。

- (12) a. *[*Quanti libri* *di quale autore*]C_q ti domandi [t C_q [*siano*
‘How many books by which author you wonder have
stati censurati t]]?
been censored’
- b. ?[*Di quale autore*] C_q ti domandi [[*quanti libri t*] C_q [*siano*
‘By which author you wonder how many books have
stati censurati t]]
been censored’ (Rizzi 2004)

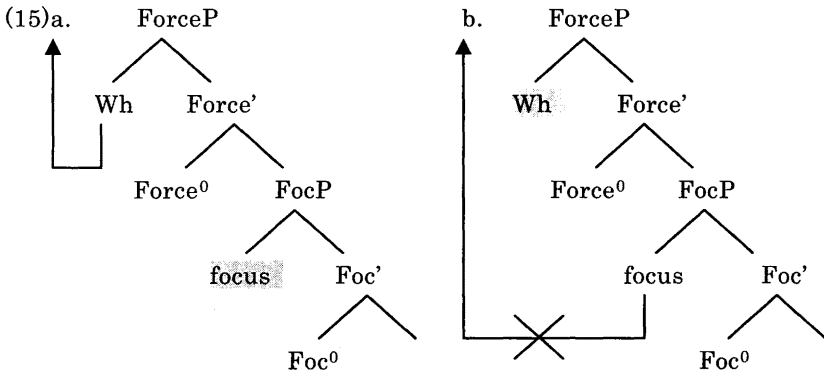
さらに、移動に関し、もう一つの制約が働くと考えられる。これは、要素間の移動の介在効果に関するもので、例えば、従属節の *Wh* 句と焦点要素のうち、一方が従属節内で移動し、もう一方が主節に移動する場合、どちらが主節に移動するかで文の容認度に違いが現れる。(13)に示されるように従属節の CP 領域に焦点要素が移動し、それを超えて主節に *Wh* 句が移動する場合は文法的であるが、(14) にみられるように従属節の *Wh* 句を超えて主節に焦点要素が移動する場合は非文となる。

- (13) Which books did Lee say that ...
- a. only with great difficulty can she carry?
b. only to Robin will she give?
c. only on the table will she put? (Culicover 1991)

(14) a. *In none of these houses do I wonder whether a student could live safely. (立石 & 小泉 2001)

b. *In none of these houses do I wonder what Mary found. (Nakamura 1994)

(13)と(14)の従属節のCPまで派生した段階がそれぞれ(15a)と(15b)に示される。従属節のCP内から主節へ要素が移動する際、焦点要素はWh句を越えて移動できないが、Wh句は焦点要素に阻害されることなく移動できる。³



本稿では、この対比は Rizzi (2002) の Feature Relativised Minimalityによるものであると主張する。Rizzi (2002)はRizzi (1990)のRelativised Minimalityを改良し、(16)を提案した。これは、(17)に示すような素性クラスのうち、同じ素性クラスに属する要素が介在する場合、移動が阻害されるという制約である。⁴この制約によると、焦点要素とWh句はどちらもQuantificationalのクラスに属するため、互いの移動に関し介在効果を示すことになる。^{5, 6}

(16) Feature Relativised Minimality (Rizzi 2002)

- a. Y can move to X iff Y is in a minimal configuration with X.
- b. Y is a Minimal Configuration with X iff there is no Z such that
 - i). X is of the same structural type (=belongs to the same featural class) as X, and
 - ii). Z intervenes between X and Y

(17) a. Quantificational: **Wh**, Neg, measure, **focus**...

- b. Modifier: evaluative, epistemic, Neg, frequentative, celerative, measure, manner ..
- c. Topic: topic

このFeature Relativised MinimalityはCP領域内の階層構造についてもあてはまると仮定すると、(13)と(14)の対比は以下のように説明できる。(13)、すなわち(15a)の構造において、Wh句が主節へ移動する際、焦点要素は主節のC⁰とWh句との間に介在しないのでFeature Relativised Minimality違反を起こすことなくWh移動が可能である。それに対し、(14)、すなわち(15b)の構造において焦点要素が主節へと移動する際、焦点要素とその主節の着地点との間にWh句が介在するためFeature Relativised Minimality違反が起こり、その派生は破綻する。

この仮定はWh句の中に焦点要素が含まれる場合、また、焦点要素の中にWh句が含まれる場合も説明できる。(18)に示されるようにWh句内からの焦点化移動は非文法的であるが、(19)に示すように焦点要素内からのWh移動は可能である。

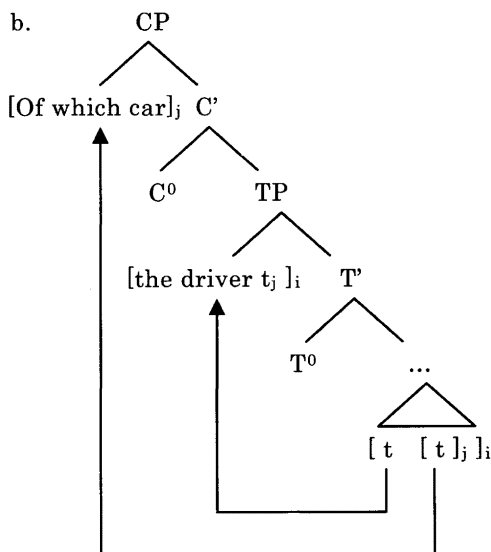
(18) a. *Only children did Lee wonder how many pictures of her mother likes.

- b. ??Of only children did Lee wonder how many pictures her mother likes.

- (19) a. ? Of whom did Lee say that only to mothers will she talk?
 b. ?Of whom did Robin say only with children can he communicate?

これらの例がどのように(16)に従うかを考察する前に、Chomsky (2005)のWh移動に関するメカニズムを考える。Chomsky (2005)は、A'移動はA移動と並行的に起こりうると仮定した。例えば、(20)において、主語 *the driver of which car* のうち、*the driver* は T^0 がひきつけ、*of which car* は C^0 がひきつける。このように、複数の主要部が一つの要素内の異なる素性を標的とするとき、その要素はSplitし、*the driver* のSpec TP へのA移動と、*of which car* のSpec CPへの移動が並行的に起こると主張された。本稿ではこれをSplit movementと呼ぶ。

- (20) a. Of which car is the driver t likely to cause a scandal?

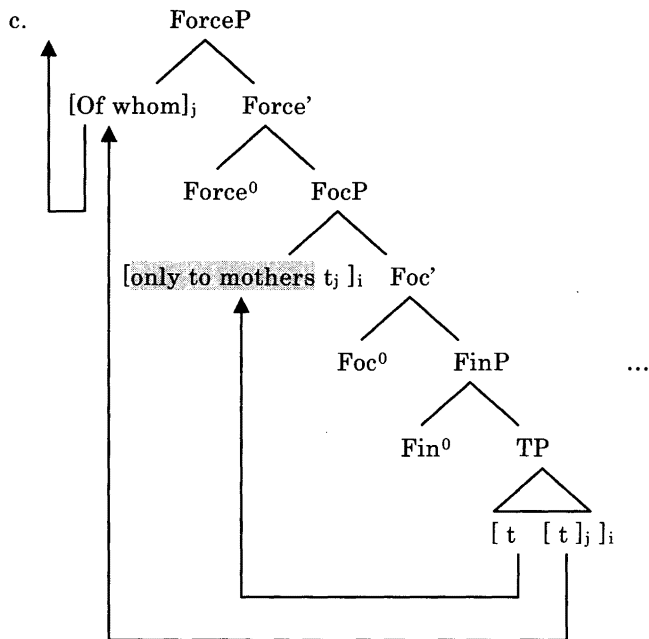


この考えをより一般化すると、二つの主要部が同一要素内の二つの異なるA'素性を標的とする場合、Split A'-movementが起こると考えられる。

例えば、同一要素内にWh句と焦点要素がある場合、それらはRizziの階層化されたCP構造内の異なる主要部がひきつけるため、Split A'-movementが起こる。この考えに従うと、(19a)の派生は(21)のように進む。(21b)は従属節のTPである。これにC⁰がMergeし、焦点要素とWh句が埋め込み節のCP領域へ移動する段階が(21c)に示される。このとき、*only to mothers of whom*はSplit A'-movementし、*only to mothers*はSpec FocPへ、*of whom*はSpec ForcePへと移動する。その後、Wh句は主節へとさらに移動し、文法的な(19a)を派生する。ここで、Wh句が主節へ移動する際、その経路に焦点要素が介在しないため、Feature Relativised Minimality違反は起こらない。⁷

(21) a. ? Of whom did Lee say that only to mothers will she talk?

b. [TP she will talk [only to mothers of whom]]

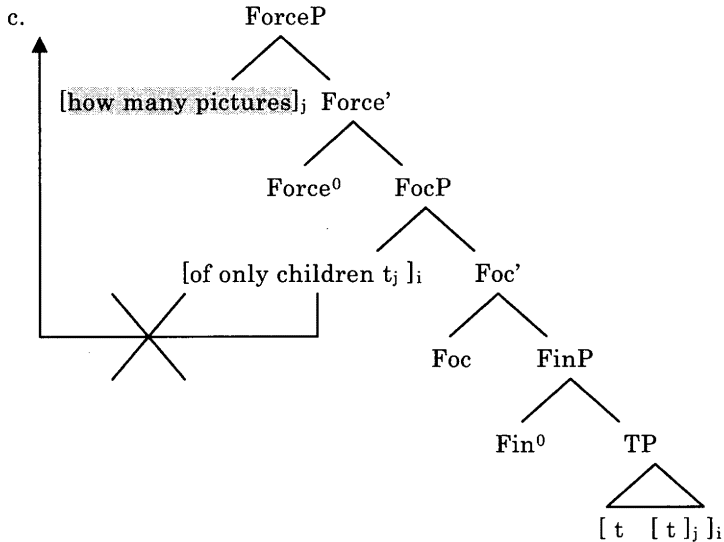


他方、(18b)の構造は(22)に示される。(21)同様、従属節のFoc⁰は*of only*

*children*を、 Force^0 は*how many pictures*をそれぞれひきつけ、Split A'-movementが起こる。その際、*how many pictures*はCritical Freezingに従うため、さらに移動することはできない。その後、*of only children*が主節へ移動しようとする際、Feature Relativised Minimality違反が起こる。なぜなら、Wh句である*how many pictures*が介在するためである。よって、焦点要素が移動できず派生は破綻する。

(22) a. ?? *Of only children did Lee wonder how many pictures of her mother likes.*

b. $[\text{TP her mother likes } [\text{how many pictures of only children}]]$



本節では、従属節内で移動した焦点要素を越えて Wh 句は主節へ移動できるのに対し、従属節内の Wh 句を越えて焦点要素が主節へと移動できないこと、また、焦点要素内からの Wh 句の抜き取りは可能なのに対し、Wh 句内からの焦点要素の抜き取りは不可能であることを示した。これは、階層化された CP 構造への Split A'-movement という移動のメカニズムと、二つの移動制約、Critical Freezing と Feature Relativised

Minimality により説明できる。次節ではこの分析を *There* 構文にも拡張する。

3. *There* 構文の DP に関する A'移動

Chomsky (2005)は、(23)に示すように、CP Phase の特性は Phase 一般に当てはまると主張する。この Phase の平行性の観点に従うと、CP 領域と vP 領域は同様の構造を持っていると仮定することは妥当であると考えられる。よって、Rizzi の階層化された構造を vP も持ちうると仮定する。すなわち、CP 同様、vP も必要があるときは独立した FocP, TopP などの投射を内包することができる。

(23) Properties of the C-phase hold of phases generally.

(Chomsky 2005:14)

また、経験的にも vP 領域が A'移動の着地点になるという事実がみられる。(24)、(25)に示されるように、ハンガリー語において Wh 句や焦点要素は動詞の直前へと移動する。これらの例は、Wh 移動、焦点化移動が vP 領域へと行われていることを示すものであり、階層化された vP 領域を支持するものである。

(24) a. Mary mit tett az asztalra t?

Mary what put the table-onto t

'What did Mary put on the table?

b. A boszorkány kit változtatott egy csúf békává t?

the witch who changed an ugly frog

'Whom did the witch change into an ugly frog?' (Horvath 1986)

(25) a. Attila félt a földrengéstől

Attila feared the earthquake-from

'Attila was afraid of the earthquake'

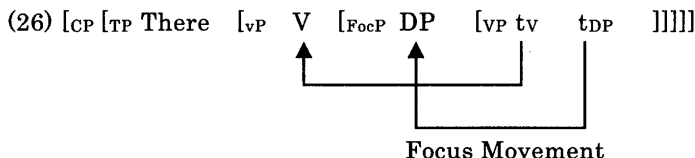
b. Attila a földrengéstől félt

Attila the earthquake-from feared

‘It was the earthquake that Attila was afraid of’

(Yanagida 2005)

ここで、*There* 構文の構造を考察する。福地 (1985)、Birner and Ward (1998) など主張されるように、*There* 構文は談話の中に新情報を導入する構文であり、Postverbal DP が新情報、すなわち焦点となる。ここでは、この DP の焦点化は統語的になされると仮定する。すなわち、*There* 構文の DP は phase edge へと焦点化移動し、 Foc^0 との Focus Criterion を満たす。線形順序の上で DP は動詞に後続するため、この焦点化は CP 領域で起こるとは考えられず、階層化された vP 領域において起こると考えられる。⁸ 焦点化された DP はriterial Freezing に従うが、このことが (2) で示した Wh 移動の制限に関与することになる。



3.1 *There*-unaccusative

まず、非対格動詞を含む *There* 構文の移動に関して考察する。非対格動詞を含む *There* 構文では、(27) に示すように補部 DP の移動は不可能であるが、(28) のように補部 DP 内からの要素の移動は可能である。

(27) a. *How many students did John say that there arrived?

b. * How many packages did there arrive in the mail?

(Chomsky 2001)

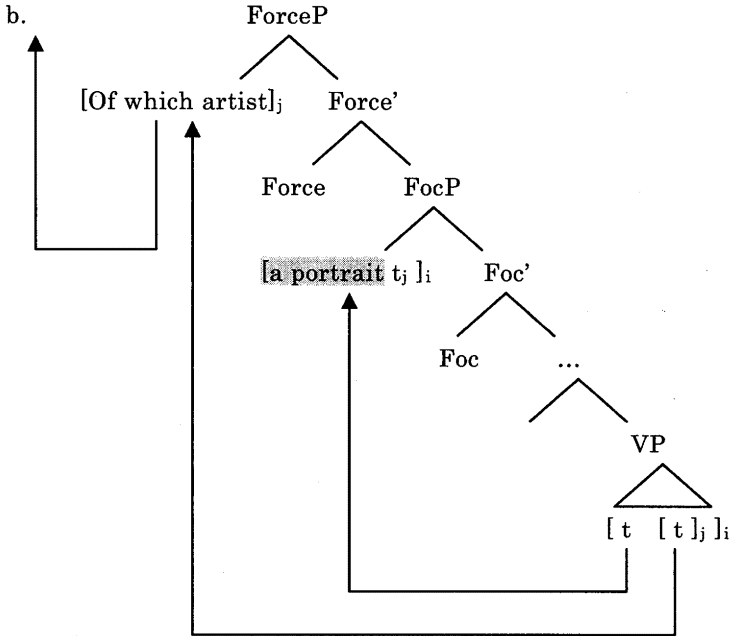
- (28) a. Of which artist did there hung a portrait on the wall?
 b. How many ancestors did there hung a portrait of in the wall?
 (Nishihara 1999)

本稿では Perlmutter (1978)の非対格仮説に従い、非対格動詞を用いた構造において主語 DP は動詞の補部に生起すると仮定する。よって、(27b)のような例において、DP は動詞の補部の位置から vP 内の FocP へ移動する。この派生が(29)に示される。その後、DP は Spec FocP で Criterial Freezing に従うため、さらに Wh 移動することができず、(27)は非文となる。

- (29) a. * How many packages did there arrive in the mail?
 b. [CP [TP there T [vP arrive_j [FocP [how many packages]_i] [vP t_j t_i]]]
-

ここで、なぜ(28)のように焦点化移動したDPの内部からのWh移動は可能なのかという問題が生じる。しかし、これは前節で提案した Split A'-movementにより説明できる。(30b)に示すように、従属節において Wh句は Force⁰ がひきつけ、焦点要素は Foc⁰がひきつける。よって、vP 領域への移動の際、*a portrait of which artist*のうち、*a portrait*は Spec FocPへ、*of which artist*は Spec ForcePへ移動する。その後 *of which artist*が CP 領域へと Wh 移動する。このとき、焦点要素は Criterial Freezingのため動けないが、*Of which artist*はすでに Splitして焦点要素内から抜け出しているため、さらに移動することが可能である。さらに、CPへのWh移動の際、焦点要素が介在しないため、Feature Relativised Minimality違反も引き起こさない。よって派生は収束する。

(30) a. Of which artist did there hung a portrait on the wall?



3.2 *There*-unergative

次に、非能格動詞を用いた *There* 構文について考察する。この構文においては(31)のようなDPの移動も、(32)のようなDP内からの移動も不可能である。

まず、この構造におけるDPの生起位置は、一般的な非能格動詞の主語の生起位置に従いSpec vPであると仮定する。このSpec vPで、DPは θ 特性を満たすとともに、焦点特性も満たす。⁹ すなわち、DPはSpec FocPにMergeし、そこで θ 役割も付与される。このときDPはSpec FocPで焦点化されるため、Critical Freezingにより、さらにA'移動することができない。このことから、(31)は非文となる。

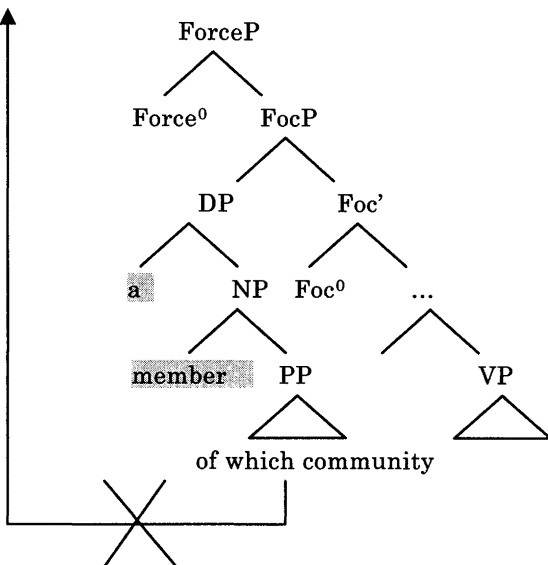
(31) a. *Who did there run down the street? (Emoto 2004)

b. *What did he say there stands on his desk? (Schütze 1999)

- (32) a. *Which community did there walk a member of into the room?
 b. *Of which community did there walk a member into the room?

また、非能格動詞の場合は非対格動詞の場合と異なり DP 内からの抜き取りはできない。これは非対格動詞の場合 DP の焦点化移動を含むのに対し、非能格動詞の場合 DP は移動ではなく直接 Spec FocP へ生起することによるものである。(32b)の派生の v P 段階の構造を(33)に示す。*a member of which community*は Spec FocP へ Merge し、そこで θ 特性を満たすと同時に焦点化されるため、Criteria Freezing により DP の主要部 *a member* はさらに動くことは不可能である。しかし、原則として内包される *of which car* は Criteria Freezing に従わなくて良いため、移動することは可能である。だが、*a member* が *of which car* を c-統御するため、*of which car* が CP 領域へ移動使用とする際、焦点要素である *a member* が介在することになり Feature Relativised Minimality により阻害される。よって、非能格動詞を用いた *There* 構文で DP 内からの Wh 移動は非文となる。まとめると、非対格動詞の場合は Split A'-movement が可能であるため内部の Wh 句は焦点要素から抜け出し CP へと移動できるが、非能格動詞の場合は DP が Spec FocP へ直接生起するため、DP が Split できず、内部の Wh 句は移動できない。

(33)



4. まとめ

本稿では Rizzi の階層化された CP 構造を支持し、同一句内に異なる A' 素性を含む句は Split A'-movement すると主張した。また、A' 移動には Feature Relativised Minimality と Criterial Freezing という移動の制約が働くことを示した。これらの移動のメカニズムにより、焦点要素と Wh 句の移動に関する相互作用が説明できる。さらに、この分析を vP 領域へと拡張した。具体的には、There 構文では、Postverbal DP の vP への焦点化移動が起こると仮定し、DP の移動、また、DP 内からの Wh 移動のふるまいを説明した。本稿の議論は、Minimalist Program の枠組みの中で A' 移動の特性や、それに関する制約を示しえた点で、A' 移動がどのように Interface Condition を満たすのかという問題に対する説明に寄与するものである。

註

*本稿の作成にあたっては、西岡宣明先生から示唆に富む大変有益なご指摘をいただいた。特記して感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿の内容や例文に関する不備はすべて筆者の責任である。

1. 本稿では、Wh 移動に関する制約は DP の vP への焦点化と関係すると主張する。この仮定に従うと、Be 動詞を用いた *There* 構文で DP や DP 内の要素の移動が可能であるのは Be 動詞の場合、vP が投射されないためと考えることができる。
2. Force⁰は疑問文か、平常文かなどの節の種類を決定し、Fin⁰は定形節か非定形節かを決定する。これらは全てのCPが持つ特性であるため、ForcePとFinPは常に投射される。
3. 以下では、Critical Freezing した句を網掛けで示していく。
4. Relativised Minimality は、演算子とそれに対応する変項の局所関係が、介在する要素により阻害されるという制約である。演算子の種類は A 要素、A'要素、主要部の三種類に分類され、例えば、A'移動に関しては間に介在する A'要素が移動に関し介在効果を示すことになる。

(i) Relativised Minimality (Rizzi 1990)

- X α -governs Y only if there is no Z such that
- a. Z is a typical potential α -governor for Y, and
 - b. Z c-commands Y and does not c-command X.

5. 異なるクラスに属する要素間では介在効果は表れない。例えば、話題要素と焦点要素は異なるクラスに属するため、互いの移動に関し介在効果は示さない。

(i) a. Not even to Terry do I expect that on my vacation I would give my favorite reading material.

b. To Terry, I think that the MONEY, LEE gave.

(and I think that the CHECKBOOK, ROBIN gave) (Culicover 1996)

6. ここで用いられる副詞の区分は Cinque (1999)に順ずるものである。measure は *a lot, little* などの量を表す副詞であり celerative は *rapidly, suddenly* などの機敏性を表す副詞である。また、evaluative の例としては *unfortunately*,

epistemic の例は *probably*、*frequentative* には *often* などが挙げられる。

7. McClosky (2002)は、連続循環的なWh移動の際、中間地点のphase headは最終的なA'移動の着地点が持つA'素性 (Q, Top, Foc, Rel) と対応する純粹に形式的な素性 (q, top, foc, rel) を持つと仮定し、この純粹に形式的なA'素性が要素をひきつけることで、連続循環的移動が可能となると主張する。この主張に従うと、中間地点のA'素性 (q, top, foc, rel) はそれと対応する主要部 (Force⁰, Top⁰, Foc⁰) に存在すると仮定することは妥当である。よって、例えば従属節中のWh句が主節へ移動する際、従属節のForce⁰がq素性を持つため、Wh句はSpec ForcePへ移動する。同様、焦点要素の移動の中間地点はSpec FocP、話題化要素の移動の中間地点はSpec TopPであると考えられる。
8. 動詞は主要部移動制約に従う形でTとの屈折関係を満たすためにvP内において一番高い主要部へと移動すると仮定する。従って、Postverbal DP よりも動詞は上位に移動し、*There-V-DP* の語順となる。
9. vP 投射内で非能格動詞がθ役割を付与されるという仮定のもとでは、vP領域内のFoc⁰もvP 投射の一部であるためSpec FocPにおいてもDPはθ役割を与えられることが可能であると考えられる。
10. (12)のイタリア語の例において、Criterial Freezing した Wh 句の中から Wh 移動は可能であることを示した。ここで、なぜこの場合は Feature Relativised Minimality の制約が起こらないのかという問題が生じるように思える。しかし、Rizzi (2004)で示されるように、イタリア語では従属節における Wh 句の着地点は Spec ForceP と Spec FocP の二つあると考えられる。よって、(12)のように二つの異なる Wh 句が一つの句の中に存在する場合、Split A'-movement が起こり、従属節において *how many books* は Spec FocP へ、*by which author* は Spec ForceP へ移動すると考えられる。この時、*how many books* は Criterial Freezing に従いさらなる移動はできないが、*by which author* は *how many books* よりも上位の位置へ Split movement しているため、Feature Relativised Minimality に従うことなく主節へ移動できる。なお、従属節において *how many books* が Spec ForceP へ、*by which author* が Spec FocP へ移動することは remnant movement に対する制約により阻害されると考えられる。

参考文献

- Birner, Betty J. and Gregory L. Ward (1998) *Information Status and Noncanonical Word Order in English*, John Benjamins Pub.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase" *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Kenneth L. Hale and Michael J. Kenstowicz, The MIT Press
- Chomsky, Noam (2005) "On Phases" Ms.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-linguistic Perspective*, Oxford University Press.
- Culicover, Peter W. (1991) "Polarity, Inversion, and Focus in English", *ESCOL*
- Culicover, Peter W. (1996) "On Distinguishing A' Movements" *Linguistic Inquiry* 27 (3)
- Emoto, Hiroaki (2004) "Topic and Presentational *There*" Ms.
- 福地肇 (1985) 『談話の構造』太田朗、梶田優編、大修館
- Haegeman, Liliane (2000) "Negative Inversion, the Neg Criterion and the Structure of CP" *Negation and Polarity: Syntactic and Semantic Perspectives*, ed. by Laurence Horn and Yasuhiko Kato, Oxford University Press
- Hoekstra Teun and Rene Mulder (1990) "Unergatives as copular verbs" *Linguistic Review* 7
- Horvath, Julia (1986) *FOCUS in the Theory of Grammar and the Syntax of Hungarian*, Dordrecht, Foris
- McClosky, James (2002), "Resumption, Successive Cyclicity, and the Locality of Operations", *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, ed. by Samuel David Epstein and T. Daniel Seely, Oxford. Blackwell.
- Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press, Cambridge
- Nakamura, Masaru (1994) "Topicalization, Neg-Preposing, and Locative

- Preposing" *Current Topics in English and Japanese*, Hituji Shobo
- Nishihara, Toshiaki (1999) "On Locative Inversion and *There*-Construction"
English Linguistics 16 (2)
- Perlmutter, David. M. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis" *BLS* 4
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman Pub.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativised Minimality*, The MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1996) "Residual Verb Second and the Wh-Criterion", in *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*, ed. by Adriana Belletti and Luigi Rizzi, Oxford University Press.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery", *Elements of Grammar: Handbook in Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, Kluwer Academic Publishers.
- Rizzi, Luigi (2002) "Locality and Left Periphery", *Structures and Beyond. The Cartography of Syntactic Structures*, vol. 3, ed. by Adriana Belletti, Oxford University Press
- Rizzi, Luigi (2006) "On the Form of Chains", *Wh-Movement: Moving On*, ed. by Cheng, Lisa L. and Norbert Cover, The MIT Press
- Schütze, Carson T. "English Expletive Constructions Are Not Infected"
Linguistic Inquiry 30(3)
- 立石浩一、小泉政利(2001)『文の構造』研究社
- Yanagida, Yuko (2005) *The Syntax of FOCUS and WH- Questions in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective*, Hitsuji-syobou Pub.